

44 『芸備医事』の複製事業について

○江川 義雄・中川 和夫

『芸備医事』の複製事業は平成九年十一月十五日に終了したので、その経緯について報告する。

本誌は芸備医学会の機関誌である。平成八年は広島医学会の前身である芸備医学会が創立されて百年の記念すべき年にあたる。この機に本誌の完全複製保存の声があり、調査してはじめて全巻不揃いという事実を知ったのである。その創刊号から五五五号の終刊に至る迄集める可く、広島県医師会をはじめとして、急拠、有志の支援協力を得て、この複製事業が発足した。比較的短期間で、困難が予想されたこの事業が完成をみたことは、関係機関、組織の積極的な活動、後援があつたことを感謝しなければならぬであろう。

明治二十九年本誌創刊号に「芸備医事を発行するの趣

旨」には、前哲の偉業を報復して、郷土の医事の進歩、将来への期待への意志を世上に発表するものである、と述べている。内容としては、内外の学術紹介、医療情報を紹介しているが、特に医の倫理、医権、医学の歴史については、毎号のように特集掲載して、医人を啓発する点多く、総合雑誌としては格調高く、先駆的なものであつて、その故に全国的に高い評価をえたといえる。

昭和十五年には富士川游の逝去や国内出版事情の悪化などにより、昭和十七年には、四十七年間の出版活動の幕をとじた。戦後は、広島島の医学会は、芸備医学会の伝統を継承して、広島医学会として再生するに至つたのである。その機関誌名は『芸備医事』より『広島医学』となるのである。しかし現在に至つても『芸備医事』を求める声が衰えず、本書の価値は不滅であることを知るのである。

本誌創刊事業にかかわつた吳秀三、富士川游、尼子四郎、三宅良一の代表者をはじめ、理事、幹事の先人達は日本医史学会設立や運営に尽力した功労者であることも本書の存在意義を再認識すべきであろう。

『芸備医事』の複製製本作業に際しては、一年分を一冊にまとめ、サイズは原本では一部不揃いのものもA4判に統一製本した。原本はマイクロフィルム化し、永久保存を目標とした。複製本書の今一つの特質としては、使用紙がアオ雁皮紙が使用されていることであり、この紙質は従来使用紙と異なり、紙幣紙と同様、酸化変性し難いもので、永年使用、保存に耐える特性を備え、ポロボロの状態になっている原本と比較すると、全く豪華な体裁に再生している。従って紙がうすく、軽い重量で、運搬移動も容易で、これからのコピー作業をしても、製本は崩れない堅牢さもあわせもっている。その観点からしても、本書の内容と共に、今回『芸備医事複製版』は複製本技術に貴重な役割を果たしたといえるであろう。創刊事業運営面から回顧すれば、その継続に数多くの苦難のあとが偲ばれる。

弱冠三十余才であった発刊時の代表者としての吳秀三、富士川游、尼子四郎、三宅良一は一年余にして尼子を残し、三名は渡欧滞独するに至る。主幹格の吳、富士川長期出張中、尼子は編集者としての重責を果している

が、その活動を強力に支援した理事、幹事の尽力も特筆されなければならない。

運営上経済的危機に遭遇するや、役員達の寄附行為もあり、殊に富士川游の影の人物と評された小田平義は私財を注ぎこんで刊行を継続させている。

本誌も終刊に近づく、紙面の質、量共に低下がみられ、内容も社会医学的傾向となり、創刊期にみられた多彩にして、歴史的内容も姿を消していく。この最終号の編集者は尼子富士郎となっていて、幹事は十三名、そのうち、最近まで活躍されていた西丸和義、佐藤美實、吉益脩夫の名がみえる。

『芸備医事』の原本は刊行百年にして復活して、その文化的遺産は医学界のみならず、広く歴史資料として、永年史家に重用される可く、広島県立文書館に寄贈・保管されるに至った。

(広島支部)